

学習意欲を高める効果的な表現カルタの制作と活用方法について

— 子どもたちが考案するオノマトペの独自性に着目して —

長嶋 佑夏 （ 千葉大学 ）

1. 目的

本研究は、現職教員への調査を通して表現カルタに求める教育的意義の実態を把握することを第一目的とし、制作者の異なる表現カルタを用いて検証授業を行うことで、表現性を高める表現カルタとは何かを把握することを第二目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：千葉県 N 市立 Y 小学校第 5 学年 1 組の計 33 名(男子 17 名, 女子 16 名)と第 5 学年 3 組の計 34 名(男子 17 名, 女子 17 名)
- 2) 調査時期：令和 3 年 7 月 12 日～19 日
1 組は教師作成、3 組は児童作成カルタを用いて比較検証した。
- 3) 調査方法：単元前に現職教員対象に「表現カルタの利用と効果に関するアンケート」、単元後に児童対象に「授業で活用した表現カルタに対する評価アンケート」を Google form で実施。「診断的・総括的授業評価」と「表現運動の形成的授業評価」を質問紙で実施。
分析方法：SPSS Statistics ver.26 を用いて t 検定、一要因分散分析と多重比較を実施。なお、有意水準は 5%未満とした。

3. 結果と考察

- 1) 現職教員の表現カルタへの期待値

「表現カルタの利用と効果に関するアンケート」の「カルタが即興的な動きにつながる」項目において、表現カルタ使用経験のある教師よりも経験のない教師の方が有意に評価が高く ($p<0.05$)、カルタが即興表現にもたらす効果に対する期待値が高いことが明らかになった。

- 2) 授業評価

「診断的・総括的授業評価」を分析した結果、3 組において「できる」・「まもる」の因子が単元前後で有意に向上した($p<0.05$)。また、「表現運動

の形成的授業評価」を分析した結果、3 組において「かかわる」の項目で 1 時間目<2 時間目、1 時間目<3 時間目で有意な差が認められた($p<0.05$)。

3) 児童による表現カルタの評価

「授業で活用した表現カルタに対する評価アンケート」を用いて、そのカルタが“即興表現をしやすいか”どうかを調査した結果、児童たちは児童作成よりも教師作成カルタの方が有意に表現しやすいと評価した ($p<0.05$)。



図 1 児童作成カルタ

共通の題材
「火山」

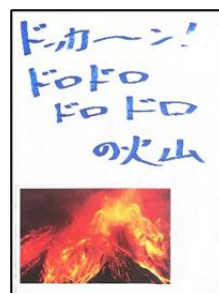


図 2 教師作成カルタ

- 4) 表出したオノマトペ

分析対象としたカルタは 20 枚ずつで、児童と教師で同数であった。しかし、カルタに書かれたオノマトペは、児童が 48 個、教師が 33 個であり児童の方が多かった。

4. 結論

児童作成カルタにはイラストやオノマトペに発想力の豊かさや個性が十分に反映されており、独自性があった。また、教師作成カルタには学習や技能のポイント等の教師の意図が内在していた。児童と教師のそれぞれのよさを掛け合わせた表現カルタを製作し、その検証を今後も続けていく必要がある。

<主な参考文献>

- 1) 寺山由美(2007)「表現運動」を指導する際の困難さについて—千葉県小学校教員の調査から—, 千葉大学教育学部研究紀要:pp.179-185